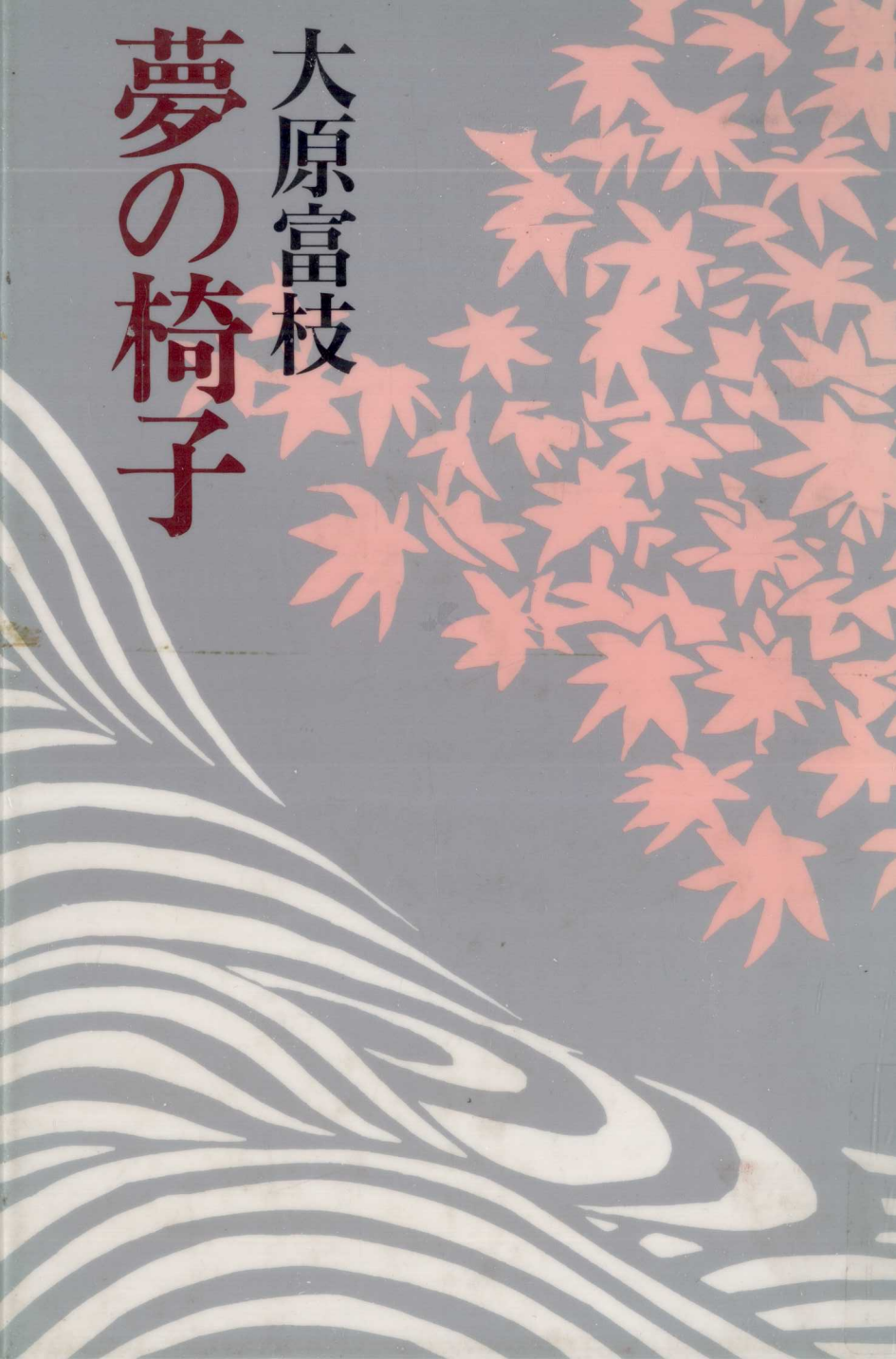


大原富枝
夢の椅子



大原富枝
夢の椅子



夢の椅子

一九八九年七月一〇日 初版印刷
一九八九年七月二〇日 初版発行

著 者 大原富枝

発行者 嶋中鵬二

印刷所 図書印刷

製本所 大口製本

〒104

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二―三四

©一九八九 検印廃止

ISBN 4-12-001840-7

目次

一	浅春	5
二	美しい父と娘	31
三	森と湖の国	52
四	霧の岬	72
五	流水織の贈物	92
六	真昼の女狐	111
七	母と娘のあいだ	130
八	ガラス工房のひと	151

九 男性の寂寥

171

十 山居の夏に

192

十一 にかい踊り

212

十二 晩秋

229

あとがき

251

夢
の
椅子

一 浅 春

自分を呼ぶ克二のいつにない大声を、里子は洗いものをしている台所で聞いた。ただならぬ声に聞えた。

急いで水をとめ、はいっと尻上りの高い声で応えた。濡手をエプロンで拭きながら、階段を大急ぎで登った。あたまの中には、意識を失って倒れている夫の姿がちらついている。なぜか、いつかそういう姿の夫を発見することがあるだろうという予感があった。

扉をあけて夢中ではいると、案外に克二は青いタオル地のパジャマのまま椅子にかけていて、のろのろとこちらを見た。

いやだ、あんな声出して。何事が起ったのかと思うじゃありませんか。

驚かされた分だけ腹立たしげな声になっている。

いや、なにね、ちょっと……。

克二は低い声でそう言いながら、妻の方をうかがうように、羞ずかしそうに眺めた。ふとつまずくような思いに捉われながら、妻の方はそんな夫をもの珍しそうに眺めた。まったくのところそんな彼を眺めるのは何十年ぶりか、結婚前かあるいは新婚のころにそういうふうなことがあったかも知れない、そう思った。

どうか、なさったの？

思わずやさしい口振りになって近づいていた。

あのね、ちょっとおかしいんだよ……。

克二はやはりどこか羞じている表情で左手をゆっくり顔にもって行つた。こうするとね、何にも見えないんだよ。真っ暗なんだよ。

言葉があんまり静かだったので、里子は狐につままれた心地になった。なにをおっしゃってるの、あなた。

克二は左手で軽く左の眼を覆っていた。夫の言葉の抑えた低さと、見馴れない羞恥の表情が不安であった。幾分不吉な思いさえする。

何も見えないんだ、真っ暗なんだよ。

まあ、そんな。じゃ、わたしも見えないんですか。

なにかからかわれているようで、疑い深く里子は言っている。心のどこかで不安がいっぺんにひろがってゆきそうな畏れのために、それに抗うように意地悪そうな声音になっている。自分で

それに気づいていた。

そうだよ、もちろん見えない。真っ暗さ、闇なんだよ。

よしてよ、そんな仕草、そんな言い方……。

里子は近寄るといきなり眼を覆っている夫の手首を取って払いのけた。

いやな人ね、そんな平気な顔して。へんな笑い方して。やめてよ、そんな妙なこと言うの……。そりゃ、こうすれば見えるよ。左は見えるんだから……。

ほんとうに、右の眼見えないの？

ああ、昨日から妙に黒いものがちらついてね、うるさいなと思うことは思っていたんだ。今、起きて見たら見えないんだ。

まあ、どうしましょう。病院へゆかなくっちゃあ。ほかにはなにかないの？ 頭痛がするとか、何とか。

里子もようやく落着いて来て、しかし、一層ただごとではないという怯えが湧きあがってくる。病院なんかへはゆかないよ。片方ぐらい見えなくたって、大して不自由じゃないもの。

克二は独言のように呟いた。夫が昔からどんなに病院を嫌っていたか、もちろん彼女もよく知っている。誰だって病院を好きなのはではない。しかし、いざ、病氣となれば、狼狽して病院へ駆けつけるのが普通だった。

どうすれば克二を病院へつれ出すことが出来るか、と里子は黙って考えていた。へたにさわぎ

立てるといっそう頑固になる人だ。

あんまりいいじゃないで、そっとしときましよう。明日になったら癒るかも知れませんが。この二、三日、少し根をつめすぎたでしょう。過労だと思わう。

克二はこの二、三日、野草の標本づくりだけに熱中していた。停年になってからも元勤めていた会社とつながりがあって、標本づくりだけは自宅で続けているのであった。

狼狽している彼を、へんに追いつめてはいけない。しばらく一人にしておいてやる方がいいのだ、と思う。

そっと顔洗っておいたら。パンと牛乳、上へ運んで来ますから。

トーストを焼きながら、一人になると大きな溜息が出た。いずれは出現するにちがいないときが、とうとうやって来た、と思う。牛乳を温めて上ってゆくと、二階の洗面台の前に、夫はぼんやり立っていた。

お部屋へおいておきますよ。何かほかに欲しいものありませんか。トマトジュースかなにか？ いや、いい。

克二は向うむいたままぼそりと言った。

顔を合せたくないらしい。長年のつきあいで里子にもわかる。机の上を少しかたづけて盆をおき、黙って階段をおりた。

自分の部屋のこたつに坐ると、時計を見上げた。いつも克二の起きて食事をする時間だった。

もうすぐ十二時である。さて、と思った。気持を整理して何をすべきかを考えなければならないと思う。夫の親しい友人たちの顔がちらちらした。しかし、自分が動くことは考えものだ。とにかく克二が落着いて、自分で病院へゆく気持になってくれるのを待つより仕方がない。

やりかけの編物を取りあげて見たが、手は動かなかった。ふとチリリという微かな音が聞えた。隣のリビングルームの電話機の音だ。夫の部屋の電話機のダイヤルを廻すとき、階下の電話機も微かに鳴るのである。里子は耳を澄して宙を見つめていた。リビングの受話器をこっそり取りあげてみたい誘惑とたたかっていた。克二が誰に電話しているのか知りたいと思う。しかしさすがにそれは出来なかった。今日のような場合でも、そんなことをする自分の姿の卑しさがたえられない、と思う。

いったい誰に電話しているのだろうか。仕事のことで会社へであろうか。受話器をおくときも微かにチーンと鳴るので、里子は耳を澄しつづけていた。やがてその音が聞えた。通話はほんの二分間ばかりであった。一息ついて、再びダイヤルを廻す音がしはじめた。一応退職はしていても仕事は続けていたので、故障が起ればいろいろと連絡しなければならない人たちはあるはずであった。こんどの電話はかなり長かった。それが終わった音を聞いてから、里子はほうじ茶をいれて二階へあがった。

ノックしたが中からは何も応えない。よくあることなので構わずはいった。克二は食事をしていた。自分の湯呑みを持って来ていて、里子はほうじ茶を注いで黙って飲んだ。黙々とまづそう

にトーストを牛乳で流しこんでいる夫を眺めながら、かかりつけの医者の名をいって、

一応お話ししておいたらどうかしら。

遠慮っぽく言ってみた。

克二は黙ったままである。

それとも、もう電話なさったの？

いや、しない。

そう。越郎さんに相談もなさらない？

探るように、里子はぼつりぼつりと言ってみる。越郎は克二の姉の息子で医者であった。

しない。

克二は取りつく島のない応えようだった。

里子は黙った。これ以上同じようなことを繰り返していると、克二は癪を立てて怒ることがあるのだ。それでも里子はそのことに黙って腰かけていた。自分の心配を夫の前に見せつけておく必要は感じていたのだ。

下げてくれ、これを。

盆を押しやりながら克二は不機嫌に言う。妻がでんと、こんなに心配しているのに、というふうに坐っているのがやりきれないのだ、と里子にもわかっていた。黙って盆を引き寄せ、自分の湯呑みをいっしょにのせて里子は立上った。階段を下りながら、ああ、あ、夫婦なんて、どうし

ようもないものだ、と思った。

里子は密かに恐ろしい不安を抱いている。一晚のうちに、いきなり片方の眼が失明するなんて、それも頭痛ひとつすることもなく、そんなことであるものだろうか。夫は何かの症状があったのを隠して言わないでいるのではないだろうか。脳腫瘍という言葉が、さっきから彼女の心に刺すようにひっかかっている。それは口に出すのもこわいような刺であった。

二十分もしないうちに、克二は静かに下りて来た。ちよっと行つて来る。

どちらへ？ 一人で大丈夫ですか。

いつものラクダのセーターのままだ。克二はかかりつけの医者の名を言う。

内科じゃしょうがないだろうけど……。

そんなこともぶつぶつ呟いている。

眼科のせんせい紹介して下さるでしょうよ。わたし、いっしょにゆきましようか。

いいよ。そんな仰山なこといやだよ。

じゃ、気をつけていらっしやい。

オーヴァを着せてやり、靴を出してやり、靴ベラを手渡してやるのも、常にはないことであつた。

車にお気をつけてね。右側をいつも気をつけてらっしやいね。

よけいなこと言うな、というように克二は返事もせず、その後姿は右肩をこころもちそびやかしている。

克二の帰って来たのは夕方であった。

明日、——眼科へゆくことになったよ。

そう。今日は何もしなかったの？　なにか多少診て下さったの？

そりゃ診ることは診たさ。

どんなふうに？

そんなこと、いちいち話せるか。

言いつて二階へあがっていった。こんな時間まで医者のところにはたはすはないし、酒の匂いもしていたから、街へ出て憂さばらしをしていたのだろう。あんまりしつこく訊かない方がいい、そう思つて見送った。

めしはいらんよ。

階段の途中から投げるように言つてよこす。はいはい。わかりました。

夫の憂鬱さはよくわかつてゐる。老年というものは孤りも氣ぶっせいなものだが、二人寄つて慰むものでもない。氣ぶっせいさも二倍になることだつてあるのだ。

支度した肴で一人猪口一、二杯の日本酒をたのしむのも悪くはなかった。年とつた亭主なんかいない方がいい。来年はとうとう六十になる、還暦なんてああ、嫌だ。いつも頭のどこかにひっ

かかっている鬱陶しいものがわずかな酒の酔いといっしょに身体じゅうに拡がってゆく。

五十代最後の齡にしがみついていた思いがしている。四十代から五十代になるときは、五十なんてああ、ふるふる嫌だわ。五十なんてもう女のうちじゃないもの。いよいよもう女のうちではなくなるんだわ、とどこか遠いところへ逃げていってしまったかった。それなのに五十になったらなつたでいつのまにか馴らされてゆき、仕方なく馴れて生きて来た。そして今度は六十になる。逃れようもないものなら、しっかり踏み止まって受けてみようではないか。そういう開き直りが湧いてくるのも、酔いの放恣のわざであらう。

二階から克二が下りて来る足音がする。洗面所や小さい台所やガスも二階にあって、勝手に自分でお茶もいれて飲めもするし、小さい冷蔵庫もあって水割りだってつくることは出来るのだ。仕事に熱中しているときは、一日顔を合せないこともあった。

リビングを覗いてみてから、そっとこちらの部屋の襖をあけた。

なんだ、一人で飲んでるのか。

はい、飲んでおりますよ。

愉しそうに里子は答えた。

誘ったってよさそうなものだ。

不服そうにこたつの向うの座ぶとんにあぐらをかく夫を、無視したように彼女は黙っている。

孤りの思いをたのしんでいるときに、あんまりありがたくはないと思っっているのだ。

猪口くれよ、おい。

克二はやんちゃな声になっている。

よろしいんですか。外でも召上ってらしたんでしょ？ せんせいはどうおっしゃったのかしら。

お酒のこと……。

いいから出せよ。たくさんは飲みはしないよ、どうせ。

台所に立って猪口を持って来ながら、

それ、もうないんですよ。一本つけますか。

うん。

一本を七分目くらいに量り、湯のなかにそっと入れた。

つまみものを一人分用意してはこぶと、芹のごまよごしをうまそうに口に入れた。

いい色にあがってるよ。

珍しく賞めている。里子は黙っていた。

あざりとわけぎのぬたも一口つまんで、うまい、と言っている。なにか、うまいと言わなければ間がもたないようなものが夫婦の間にあるのだった。それが里子には仄かな愁^{かな}しみに感じられる。

明日、——眼科でいろいろの検査をするんだって。それで原因がわからなければ、脳外科へ行くことになるのだそうだ。